社会主義国家の小数民族 (II)

森田　昌幸

目　次

4. ロシアの侵略
5. 革命の影響
6. カザフ
7. キルギス
8. タジク
9. ウズベク
10. トルクメン

4. ロシアの侵略

ロシア帝国がアジアにおける野蛮国として，ヨーロッパ世界から敵視されていた頃，カザフ，キルギスなどの諸民族は，まだ近代的な民族国家としての自覚にまでは達していなかった。これに対して，ロシア帝国は不凍港獲得を旗印として，いわゆる南下政策を各方面において，露骨に展開していたのである。このロシア帝国の勢力拡大政策は，当然のことながら各地域において諸外国と衝突することになった。例えば，ロシアは17世紀末に清帝国とネルチンスク条約を締結したが，この条約はロシアの南下政策が康熙帝によって阻止された結果，その妥協の産物として成立したものであった，とされている。同様のことが，ロシア帝国の南方国境においても発生していた。18世紀の初め頃より，ロシアとトルコの関係は悪化し，ロシアはトルコ領地域をしばしば占領している。例えば，1723年，今日のアゼルバイジャン共和国の首都バクーが，ロシア軍によってトルコより奪取された。その後も，ロシアは帝国の南部あるいは南

西部において，勢力拡大を計り，トルコ領のいたる所でトルコ軍と衝突した。これが1768年にいたり，第1次ロシア・トルコ戦争に発展したのである。この戦争はロシア側の勝利で終り，1774年7月にルーマニアのクチュク・カイナルジで休戦条約[1]が締結された。この条約によって，ロシアはバルカン及びトルコに対する南下政策を一層強力に推進[2]して行くのである。

1787年の第2次ロシア・トルコ戦争でも，ロシアは白ロシア，西部ウクライナなどを占領することに成功した。この戦争でロシアは，ヨーロッパへの出口を得たわけである。やがて，19世紀にはいると，ロシアの南下政策はいよいよ西アジアにおいて活発となり，1801年グルジアを占領するにいたった。

ロシアの南下政策はロシア帝国の伝統的外交政策であり，諸列強との植民地獲得競争参加のためには，不凍港の獲得が先決問題であった。18世紀から19世紀にかけての世界政治は，ロシアの南下政策とそれを阻止せんとするイギリス，フランスその他の列強との衝突によって特徴づけられる。特に18世紀後半，ロシアの勢力圏拡大に熱心であったエカテリナ二世（Ekaterina II）は，西アジアから中央アジアに対する征服欲が強く，南下政策を推進する力のひとつの中心であった。例えば，アゼルバイジャンに対して征服が開始されたのも，エカテリナ二世の治世の末期[3]においてであった。エカテリナ二世死後も，この政策は受け継がれて，19世紀後半にはトルコの勢力にかわってロシアが支配権を握るようになった。ロシア帝国の西アジア進出は，トルコ勢力との抗争の過程において，次第に確立されて行ったのである。ペートル大帝（Peter the Great）やエカテリナ二世の領土拡大政策は，アレクサンドル一世（Alexander I）によって継続[4]された。

19世紀初めに，トルコの侵入を受けたグルジアでは，ロシアに軍事援助を乞い，トルコの侵略からのがれることが出来た。当時のグルジアは国民のほとんどが貧しい農民であり，これをごく少数の地主が支配していた。この地主階級はロシア帝国の支配下にグルジアをおくことによって，自分達の身の安全を計ったのである。1801年，ツアーリの軍隊がグルジア領内に進駐[5]してきた。グルジアがロシアの支配地域となったのは，この時からである。その後，グルジ

ア人はツアーリの軍隊に対して武力抵抗を試みたが，すべて鎮圧された。

同じ頃，アゼルバイジャンとアルメニアが，やはりロシアの支配を受けるようになった。アゼルバイジャン及びアルメニアは，本来ペルシア領であった。ロシア帝国も植民地争奪戦を西アジアにおいて展開し，ペルシアをめぐってイギリスと対立した。ロシアのペルシアに対する侵略は，1813年に開始[6]され，この戦争でペルシアは敗れ，ロシアとの間に屈辱的なグリスターン条約（Treaty of Gulistan）を，同年締結させられたのである。この結果，ロシアはペルシアから，アゼルバイジャンとペルシア北部領土を獲得した。しかし，ペルシア側のロシアに対する反抗がその後も継続して行われ，ロシア・ペルシア間には1826年から再び戦端が開かれた。この戦争においても，ロシアはペルシアを一方的に撃破し，またしてもペルシアにとって屈辱的なトルコマンチャイ条約（Treaty of Turkmanchai）[7]を，1828年に締結せしめたのである。この条約によりロシア側は，アルメニアの一部を獲得し，エレワンを占領したのである。アゼルバイジャンとアルメニアに対する支配権の確立により，ロシアはカスピ海沿岸[8]に，軍事並びに商業上の中継地を得たわけである。

カザフ，キルギスなどの中央アジア地域に対するロシアの征服政策も，19世紀初めに一段と強化された。カザフに対しては，その領内にロシア軍の陣地が構築され，これがカザフ人を刺激し，ロシアに対してしばしば反抗させる結果をまねいた。しかし，19世紀半ばまでには，ロシアのカザフ支配は大体終了していた。キルギスに対しても，ロシアはカザフを軍事上の根拠地として軍事介入を行ったように，キルギスを植民地化した。同様にして，ロシアはウズベク，トルクメン，タジクの支配を19世紀末までには完了したのである。

占領地域に対して，軍隊を常駐させ，官僚と商人を送りこんでこれを支配するというのがロシアの植民地経営の方法であった。このようなロシアの膨脹主義に対して，それを無条件に受け入れた民族はひとつもなく，すべての民族はその興廃をかけて戦ったのである。例えば，トルクメンの如きは，もともと好戦的な民族といわれてはいるが，強大なロシア帝国の軍隊を相手に独力で12年間[9]も戦った経験をもっている。ロシアの西アジア及び中央アジアに対する侵

略は，まったく執拗な戦争の連続であった。しかし，いずれの民族もロシアの軍事力の前に，すべて征服されるのである。ロシアにおける資本主義は，20世紀の初めまでに，独占資本主義の段階[10]に突入した，といわれているが，これは西アジアや中央アジアの諸民族を，掠奪的植民地経営によって搾取した結果によるものであった。

5. 革命の影響

資本主義発達の未熟な農業国であるロシアにおいて，社会主義革命を成功させるためには，よく訓練された職業的革命家による，少数精鋭主義によって組織された党の指導を必要とする。1898年にミンスクで創立されたロシア社会民主労働党は，1903年第2回大会において，レーニンの率いるボルシェヴィキが革命達成のため，労働者と農民の代表者による立法権，行政権などの，国家権力のすべてを独占的に行使するという独裁政治の方向を明確にした。このボルシェヴィズムはロシア資本主義の特殊性[11]を背景として，それに対応するための理論であるとされている。すなわち，農業国ロシアにおいては，議会制民主主義の方法によっては，真の社会改革は達成出来ないものと考えられた。そのために，全国家権力をひとつの組織，あるいは一人の独裁者[12]に集中させることによって，強力に社会革命を遂行せんとしたわけである。

ここで注目すべきことは，この理論が適応出来るのはロシアのような後進資本主義国においてである，という主張である。これはマルクスの理論，資本主義が高度に発達した国家においては，かならずしも暴力革命によらなくてもよい。議会制度を認め，これによって平和的に社会主義政治権力を掌握し，共産主義への道を進むことも可能である，とする理論の反対解釈である。ロシア革命を成功させた職業的革命家達は，マルクスの理論をかならずしも忠実に守ったわけではなかった。そしてこのロシアの特殊性である後進性[13]を重視したことが，ロシアとその周辺の同様の諸民族，諸国家に対し，非常に大きな影響を与えることになるのである。

1917年10月，レーニンに指導された労働者と兵士達は武装蜂起し，流血の市

街戦[14]の後に，ペトログラード・ソヴィエトが首都において全権力を掌握した。モスクワその他においても多大の流血の後に，次々とソヴィエト権力が樹立された。いわゆるロシア十月革命の成功である。ペトログラード及びモスクワにおけるソヴィエト権力の樹立が内外に与えた影響は，非常に大きいものであった。ロシア帝国の植民地的支配を受けていた西アジア，中央アジアの諸民族の中にも，ボルシェヴィキの影響は強められて行った。帝政ロシアの西アジア，中央アジアに対する植民地政策は，まさに掠奪であった。それは大英帝国のアメリカにおよる植民地政策[15]，大日本帝国の朝鮮，台湾，東南アジアにおける植民地政策とは，かなり異なるものであった。

今日のソ連邦の南西部に相当するこの地方は，綿花と農作物の栽培が主たる産業である。従って，住民の大部分は農民である。かつて，1861年に，アレクサンドル二世によって，農奴解放が行われた時にも，この恩恵は西アジア，中央アジアの農民達には与えられなかったのである。それどころか，むしろ農奴制が逆に強化されていた。これはロシア本国における政治的，経済的要請によるものであった。ヨーロッパにおいて，1914年，第一次世界大戦が勃発すると，ロシア帝国の西アジア，中央アジアに対する搾取は非常に苛酷なものとなった。さらに，経済的な搾取ばかりでなく，同一民族同志の対立を激化させ，民族意識の覚醒をさまたげるような政策をとった。すなわち，政治的には帝政ロシアの絶対的服従を強制され，経済的には掠奪的植民地政策を断行され，一般農民の民族意識は低く，貧困と圧迫にあえいでいたのである。

共産主義イデオロギーが侵入してくる基盤は，これらの民族間にはすでに出来ていたのである。各個人に政治的，経済的自由のないこと，各民族に特別の自覚がないこと，これらを打破して民族独立を達成するには，よく訓練された職業的革命家による独裁しかあり得ない。この意味において，政治権力の一党独裁形態であるレーニンの共産主義イデオロギーが，ロシア本国の労働者，農民と同様に，周辺諸民族の指導者に受け入れられたといえよう。この場合，革命思想はロシア，特にペトログラードにおける労働者とその指導者によって与えられたものであって，決して周辺諸民族[16]の中から革命思想が成熟してきた

のではないことに注目する必要があろう。辺境の労働者，農民の中心的指導者となったのも，多くはロシア人であった。そして，多くの異民族を革命の方向へ前進させ得たのは，ツァーリズム打倒という共通目的があったためである。ロシア本国でツァーリズム打倒の戦いが進展するにつれて，辺境諸民族の中にも，その動きに呼応するものが現れてきた。20世紀にはいると，ロシア帝国の内部において，地下に潜行したボルシェヴィキの活動が活発となった。

連合国の一員として，ドイツ側との戦争に参加したロシアは，食糧の補給や人員の補充のため，西アジアや中央アジア辺境の諸民族に対しても，搾取の強化を行ったのである。しかし，第一次世界大戦はツァーリズム打倒勢力にとって幸運であった。国内における皇帝に対する信頼は，血の日曜日以来ほとんどうしなわれていた。前線の将兵も志気は非常に低下し，装備も貧弱で，中には素足に手ぶらの兵士も多数いた。それに加えて明確な戦争目的をもっていなかったことが，脱走兵の激増をまねいた。ツァーリの権力はこのような軍隊の上にあったのである。従って，戦争が長期化すればするほど，ツァーリの権力と威信は低下して行った。ボルシェヴィキ労働者はこの事実を巧妙に利用した。レーニンの主張する「帝国主義戦争を内戦に転化せよ，そして軍隊を革命化せよ，その過程において人民による政治権力の掌握が可能になる」という理論[17]を実践することが，革命家達の当面の課題であった。

レーニンはロシアにおける革命の成功と，民族自決との関係を重視していた。ロシアは民族的に多種多彩な国家であるから，そのロシアにおいて革命が成功するということは，各民族が労働者階級によって完全に統一されなければならない，と考えていた。ロシアが労働者階級のみによるひとつの政治権力で統一されないのは，各民族のブルジョア民族主義のためであり，特にその傾向の強いポーランド民族，ユダヤ民族，ウクライナ民族，グルジア民族などのブルジョア民族主義の打倒[18]を呼びかけたのである。すなわち，各民族の独立を主張しながらも，大ロシア主義[19]の枠をこえてはいなかった。この大ロシア主義の枠の中に，ロシア辺境の諸民族が本当に含まれるものであるか否かは疑問である。

ロシア人と辺境諸民族とが人種的[20]に異ることは，明白であるが，ロシア人ならびに西アジア及び中央アジア人も，蒙古に征服されたという共通の事実がある。ロシア人とカザフ，キルギス，グルジアなどの民族とは，アジア人に支配されたという事実以外には，それ程共通点はない。しかし，ツァーリ権力の黄昏にあたって，ツァーリ権力の打倒と民族の独立という目的に対しては，共同歩調をとることが出来た。このような情勢のもとにおいて，1917年，ロシア十月革命が成功するし，革命の波は次々と各方面に伝わって行ったのである。

6. カ　ザ　フ

19世紀末よりカザフでは，すでに民族独立の気運がみられた。独立運動の中心的存在となった人々は，カザフがすでに部族から民族への発展をとげていることを自覚した。しかるに，カザフの教育はツァーリのために，ロシア語で行われ，民族感情は無視されていた。このようなカザフに民族としての自覚を呼びかけた啓蒙運動家[21]には，ウァリハーノフ(Shoquan Shingis-uli Valiquan-uli, Valikhanov）やイブライ・アルテンサリン（Ibray Altynsarin）それに，アバイ・クナンバイエフ（Abay Qunanbey-uli）などがいた。これらの人々の影響で，独立の意気に燃えるカザフ人は，1905年の血の日曜日以来，ツァーリ軍隊に対して地下組織による抵抗を行うにいたったのである。これを直接指導したのは，カザフの知識人，労働者達であった。しかし，ツァーリの辺境守備軍に対して，組織的抵抗を行うまでにはいたらなかった。

カザフ人がボルシェヴィキの影響を受け，ツァーリ軍隊に公然と武力抵抗を試みるようになったのは，1916年以降のことである。1917年，二月革命はカザフの独立運動に多大の影響を与えた。特に，共産主義者達は二月革命のブルジョア民主主義を否定し，全権力をボルシェヴィキ労働者が独占することを主張した。革命後に，カザフ共産党の領袖となったアマンゲリドゥイ・イマヌエフ(Amangeldi Imanuli）などは，その一人[22]であった。ケレンスキーの反革命軍に対抗して，独立運動擁護のため，独立の武装集団が設立された。1917年4月には，人民会議が誕生し，カザフの行政機関，裁判所，学校などにおいて，公用

語をロシア語からカザフ語に変更した。さらに，7月21日から26日にかけて開催された第二回人民会議において，ツァーリの一切の支配に反対することを決議した。やがて，1917年，十月革命がおこり，カザフもこの影響を受け，ロシアの内戦へとまき込まれて行くのである。1917年12月5日から13日にかけて開催された人民会議において，カザフ人民の代表はカザフ自治を宣言[23]した。しかし，ロシア反革命軍による新政権の打倒に，カザフ人は全力をあげて防衛しなければならなかった。

1918年初め，革命軍がオリエンブルクを占領し，オリエンブルク――タシケント鉄道の一部を獲得したため，カザフ人民政権は一応の危機をのがれることが出来た。その後，イワーノフ将軍の反革命軍をシベリア近くまで追跡している。カザフ人が反革命軍の打倒に参加したのは，カザフの独立を守るためだけでなく，ボルシェヴィキに指導された革命軍の一員[24]としての地位を与えられたからである。反革命軍の脅威がとり除かれてからは，ソヴィエト政府はカザフ人に条件付きで自治を許している。その条件というのは，カザフがソ同盟に加盟し，ソ同盟共産党の支配を受けるというものである。カザフの自治は1920年8月26日[25]を期して実現した。これが今日のソヴィエト社会主義共和国連邦カザフ共和国である。しかし，この共和国は主権国家ではない。国家権力の最高機関としては，ソ同盟最高ソヴィエトが設置されている。最高ソヴィエトには最高ソヴィエト幹部会，ソ同盟閣僚会議が属している。従って，形式的には民主主義的政治機構を備えているが，どこまで民族自治が確立されているかは疑問な点もある。例えば，当時のソ同盟全体の利益と，カザフ民族の利益とは，いずれが尊重されるか，といった点である。ともかく，カザフでは形式的自治が，ロシア革命後2年を経て実現したのである。

7. キルギス

キルギスにおけるツァーリの権力に対する抵抗運動は，1916年頃より活発化していた。ロシア帝国の過酷な植民地支配は，大部分の農民の反発をまねき，組織的反抗のための指導者を求めるまでになっていた。キルギスにおけるボル

シェヴィキ労働者の数も，次第に増加し，暴力革命思想の洗礼を受けていない一般民衆も，その影響を直接的に受けつつあった。ロシアの資本主義がようやく発展段階にはいる頃，辺境においても，工業地帯では自分の身体以外に何物も所有せず，その労働力を資本家に売り，その労賃でしか生活し得ない階層がすでに生れていた。この階層の中心的存在としては，やはりロシア人労働者が有力であった。キルギス人にはキルギス人としての民族的自覚が，ある程度はあり，かならずしもロシア人との関係が友好的に行われてはいなかったのであるが，ツァーリの圧政の前には，ロシアはまさに共通の敵であった。ロシア帝国が第一次世界大戦に参戦した結果，ヨーロッパ・ロシアにおける戦争遂行政策は，次第に辺境にまで影響を与えるようになった。特に，前線に送るための食糧は，キルギスやその周辺地域からも，強制的に徴発された。住民の生活は日に日に苦しくなるばかりであった。

帝政ロシアの支配下にあったキルギス人は，他の中央アジア諸民族と同様に，植民地主義の犠牲者であった。ドイツとの戦争のため，キルギス人も容赦なく前線に送り出された。このため，ロシアの過酷な支配に対する反抗が各地で起り，しかもそれは組織的なものにまで発展した。この暴動は単にキルギスのみでなく，ロシア帝国の支配下にある中央アジア全体に拡大されて行った。キルギスを始めとするこの地域一帯は，まさに戦争用の人員収容所[26]であった。ロシア人に対する反感は，住民の中の指導的地位にある人々が，かなり扇動[27]したところもある。キルギス人は元来遊牧民であった。しかし，ロシアの植民地政策の拡大発展は，次第に牧草地を縮少し，キルギスには山岳以外の土地は皆無に等しい，と嘆かれるまでになった。このような事実も，キルギス人の反ロシア感情の一部分を占めていたのである。食糧徴発のため，ほとんどすべてのものを取りあげられた農民，牧草地を追い出された遊牧民，しかも植民地支配者に対する嘆願は，いずれも冷酷に無視されてしまった。キルギス人にとって，生命を維持するために残された手段は，武器を手にとり，ツァーリ権力と戦う以外に何もなかった。これが1917年，ロシア革命が起る前のキルギスの情勢であった。

キルギス人はロシア帝国の官憲に，租税と強制的肉体労働との両方で苦しめられたのであるが，ここにもうひとつ，キルギス人の敵視する階層があった。それはツァーリの権力の庇護下にあって，キルギスの住民を間接的に搾取した特権的ロシア商人[28]であった。現住民の武力抵抗が起った時，これら商人は最初に襲撃されるのである。1916年に，ロシア領中央アジアにおいて，ツァーリ支配に対抗して，武力闘争が起ったのであるが，これはツァーリの軍隊によって鎮圧されてしまった。しかし，ロシアの過酷な支配下にあったキルギス人は，ロシア帝国の植民地支配から離脱するためには，帝国主義そのものと対決し，帝国主義諸国間の戦争を，革命的内乱へと発展させて行く戦術に協力[29]したのである。これは単なる不満の一時的爆発ではない。ボルシェヴィキの指導下に，革命への道を進んで行くものと考えてよい。事実，キルギスのロシア人及びキルギス人労働者は，この当時すでにボルシェヴィキ労働者の直接指導を受けていたといわれている。

1917年2月，ついにペトログラード労働者兵士代表ソヴィエトが成立し，皇帝は退位した。この二月革命の段階における辺境諸民族の動向は，いかなるものであったであろうか。すなわち臨時政府とボルシェヴィキとの民族政策の相違である。ここではこの問題について，くわしくはふれないが，一般にボルシェヴィキ派の歴史家にいわせるならば，臨時政府の辺境民族政策は，帝政ロシアのそれと少しも変化はなかったという。もともと臨時政府を帝国主義ブルジョアジーとみなし，これをソヴィエトと対立させて考え，真の革命はボルシェヴィキ労働者によらなければ達成出来ないと考えていたのであるから，それは当然であろう。従って，各民族ソヴィエトが人民の真の革命権力の基盤であると考えられた。事実，ボルシェヴィキはツァーリ植民地において，それを実行していたのである。民族圧迫政策廃止というスローガンのもとに，民族解放運動が展開されていた。ただし，ここで見逃してならないことは，この民族解放運動の先頭に立っていた指導者達が，民族ブルジョアジー及び自由主義者，インテリであったということである。従って，当時の辺境民族の解放運動には，大きく分けて二つの流れがあったと考えられる。そのひとつは民族ブルジョア

ジー及び愛国的インテリ，もうひとつはロシア社会民主労働党，特にボルシェヴィキの革命思想[30]の影響を受けた革命家達であった。そのいずれが正しく，いずれが誤りであったか，といった問題にはここでは立ち入らない。それは革命後今日までの歴史が証明してくれるであろう。

キルギスにおいても，臨時政府のもとでは住民に対する租税及び前線における雑役の義務は，ツァーリ植民地下においてよりも過酷なものになったといわれている。あるいはそうであったかも知れない。しかしそれは臨時政府が，相変らず「愛国的」戦争遂行をさけんでいたからであって，後の内乱時代に反革命軍討伐のため，強制的に組織された各民族の革命軍についても同様のことがいえるのではあるまいか。1917年3月2日，臨時政府最初の内閣が成立すると，キルギスでも鉄道その他でストライキが起り，労働者代表ソヴィエトが成立した。この運動を実際に指導し推進したのは，ロシアの労働者と兵士であった。農民は革命に立ち上る気力もなく，大土地所有者や回教僧侶の主張に盲目的に従っていた。農民が革命の先頭に立つ，といった事実はなかった。そのため，ボルシェヴィキは1917年の二月革命以降十月までの間に，ロシアにおける支配権を名実ともに確立するためには，ロシア人以外の多くの異民族の協力を必要とし，それが得られるような政策を掲げ，運動を展開した。この政策の結果[31]はキルギス地方にもおよんでくるようになり，ボルシェヴィキのもとで民族独立を達成せんとする感情が，キルギス人の中にも行きわたるようになるのである。

十月革命がペトログラードで成功すると，キルギスの労働者達もこれに呼応して大規模なストライキを実行した。これを指導したのは，勿論ボルシェヴィキ労働者達であった。直接の指導者は，1919年9月，モスクワから派遣されたM. V. フルンゼ及びV. V. クィブィシェフの2名であった。この2名がキルギスにおける自衛軍追撃を行い，ボルシェヴィキ政権の強化を行ったのである。キルギスの住民は，労働者も，キルギス人の国家[32]としての独立を望んでいたのであるが，ツァーリの軍隊及び臨時政府の軍隊を武力で撃退するためには，キルギス単独では不可能であった。従って，武装した労働者，農民の組織が必

要であった。これらの労働者，農民を指導したボルシェヴィキは，キルギス人に対して少数民族の自由と独立の確保，民族的宗教の制限廃止，民族の自治権などを約束した。これはレーニンの名によって発せられた「ロシア各民族の権利に関する宣言」に基づくものである。しかし，社会主義革命を実行しつつあるソヴィエト・ロシアにとって必要なことは，外国の干渉からその社会主義政治権力を擁護することであった。今日のソ連領中央アジアを構成する各民族は，レーニンの政治権力を守るひとつの手段であった，と見ることも可能であろう。そのためには，宗教，言語，文化，民族愛などのすべてを統一し，各民族の独自性を否定しなければならないはずであった。しかるに，それが事実は逆であった。これは後に重大な課題を残すことになるのであるが，ここでは一応ふれないことにする。

とにかく，ボルシェヴィキはロシア本国においてツァーリズムを打倒したと同じ手段を用いて，キルギスにおいても，ボルシェヴィキ政権を樹立したのである。キルギスのみならず，他の中央アジアにおいてみられるこの時代の特徴は，ボルシェヴィキに率いられた革命軍と反革命軍，例えばアレクセーエフ将軍のコールニロフ残党，カレジン将軍のドン・コサック，セミョーノフ将軍のザバイカル・コサック，ドウトフ将軍のオリエンブルク・コサック，クライスラーノフ将軍のアストラハン・コサックなどコサックを中心とする自衛軍とが各地で衝突し，さらに外国軍隊の干渉戦も行われ，それに加えて，各民族の独立を目的とした戦いが展開されたことである。例えば，1917年11月，コーカンドに樹立された「コーカンド自治政府」は，イギリス人の援助を多分に受けていたといわれる。

いずれにせよ，キルギス人が内乱時において考えていたことは，革命の成功でも白衛軍の勝利でもなかった。キルギスの民族自治であった。キルギス地区において，民族自治の方向が形式的に定まりかけたのは，革命から5年経た1922年[33]の4月頃のことであった。ここでも，キルギスはカザフ，トルクメンとその支配領域の問題で紛争を起した。すなわち，セミパラチンスク，ペトロパブロフスク，オリエンブルクのさらに北方を含めんとする大キルギス主義の

運動が，周辺民族と衝突したのである。しかし，キルギスがソヴィエト連邦の正式な共和国として認められるまでには，なお10余年の年月が必要となるのである。その時のキルギスの中心的な指導者が，アブダルケリム・シディキエフ[34]などであった。もともと，分裂割拠主義的傾向の強いキルギス人を，ひとつの強力な支配権のもとに集中させ，そこでキルギス人の国家を樹立せんとするものであった。今日のキルギス・ソヴィエト社会主義共和国が正式に成立したのは，1963年になってからのことである。

8. タ　ジ　ク

1916年の人民反乱によって，タジクにおけるボルシェヴィキの活動は具体化された。帝政ロシアが第一次世界大戦に参加した結果，ロシア領中央アジアの諸民族にも，戦争遂行のための負担が重くのしかかってきた。ツァーリの植民地経営者達は，これら辺境の住民に対して，戦費のための財源として，重税につぐ重税を課した。タジクの住民も例外ではなかった。タジクはウズベクの一部として，十月革命を機会に独立を望んでいた。従って，ロシアの中央アジア搾取が強化されると，ウズベク人と共にツァーリズムに対抗した。当時のタジク人は大部分が貧しい農民で，特に綿花の栽培を行っていた。しかし，その綿花はほとんどすべてヨーロッパ戦線へ，あたかもただ同然に運ばれて行った。しかも，ロシア人以外の民族はツァーリの軍人になれなかったにもかかわらず，雑役夫としてヨーロッパ戦線へかり出されて行った。この雑役徴発の命令が1916年6月正式に発せられると，農民は反抗[35]を開始した。この暴動を鎮圧するために，ツァーリは軍隊をヨーロッパ戦線から移動させなければならなかったほどであったといわれる。

このように，ロシア帝国の末期には，中央アジアの民心はきわめて不安定であり，流動的であった。強力な組織を持ち，ツァーリ・ロシアの支配に抵抗する武装集団があれば，現実の生活苦を脱するためには，いかなるものにも協力する下地がすでに出来あがっていたのである。また，このロシア領土中央アジアにおける諸民族の蜂起が，逆にペトログラード及びモスクワその他のロシア

国内に，革命への新たな運動を高揚させたとも考えられる。やがて，1917年2月，ロマノフ王朝が滅亡すると，それに代って政権の座についた臨時政府は，やはりドイツとの戦争継続を決定した。このため，中央アジアにおける政策はツァーリのそれと何ら異なるところはなく，住民の生活は一層苦しいものとなった。二月革命の成功によりタジクでもロシア人排撃が勃発したが，トルキスタン方面軍を完全に掌握するクロパトキン[36]には反抗出来なかった。しかし，二月革命後の労働者や農民は，ボルシェヴィキの影響を受けた者が多く，その要求も急進的であった。臨時政府はクロパトキンの軍隊によって中央アジア全域を支配することが困難となり，3月にクロパトキンは更送され，4月7日にトルキスタン方面委員会[37]が樹立され，この地方における支配権を臨時政府より与えられたのである。

しかし，臨時政府の中央アジアにおける民族政策が，ツァーリのそれと大同小異であったことは，すでに述べた通りである。一方，ボルシェヴィキは，いわゆる「全権力をソヴィエトへ!」を旗印に，二重権力の時代において，独自の武装集団を組織しつつあった。ボルシェヴィキの革命理論によれば，その革命はペトログラードやモスクワの労働者だけでなく，当然のことながら中央アジアの被圧迫諸民族にも波及しなければならなかった。1917年10月，ペトログラードにおいて，レーニンの武装蜂起が成功すると，タジク地方でもボルシェヴィキは政治権力掌握のため，臨時政府の軍隊に対して，武力行動開始の準備を進めていた。10月の末に，コサック及び士官学校生徒は，ボルシェヴィキ革命委員会を攻撃した。これに対し，ボルシェヴィキ側も逮捕された革命委員救出のため，タジク人を含む多数の武装労働者を急派し，数日間にわたる市街戦が展開された。やがて，市街戦に勝利を得た労働者，農民はトルキスタン方面における事実上の支配権を確立したのである。

一方，臨時政府支持者達と白衛軍とは，ボルシェヴィキ打倒の目的の前に，共同作戦をとり，1917年11月，コーカンド自治政府を樹立した。これはトルキスタンをボルシェヴィキの支配から解放し，白衛軍の根拠地[38]にせんとした白系ロシア人の反抗であった。しかし，トルキスタンにおける赤軍はボルシェヴ

ィキ労働者に指導され，労働者，農民の団結は比較的強かったといわれるのに反して，コーカンド政府はその政治権力を維持するだけの軍隊を持っていなかった。コーカンド自治政府はトルキスタンの各民族を支配し得る十分な政治力，軍事力，明確な政治目的のいずれもなかったことから，赤軍に対抗し得ないのは当然[39]であったといわれる。赤軍はこのコーカンド自治政府に対して，1918年2月14日，その全力をあげて絶滅作戦を展開し，2月18日これを殲滅した。この時の赤軍は，鉄道員や紡績工，手工業者のみでなく，農民も参加して行われた。タジクの農民も，このコーカンド絶滅作戦に参加している。その後，タジクはウズベク，キルギスなどと，支配領域問題で争うことになる。タジクがソヴィエト連邦で第7番目の共和国として承認されるのは，1929年12月5日[40]のことである。

9. ウズベク

中央アジアの諸民族と同様に，ウズベクにおけるソヴィエト政権樹立の闘争も，非常な困難をきわめた。すなわち，ツァーリ・ロシアに対するウズベク人の反感が，1917年の革命直前までに，すでに相当充満していたこと，重税につぐ重税で生活が苦しく，ツァーリの植民地支配がウズベク人を武装蜂起寸前にまで追い込んでいたこと，1916年の中央アジアにおける住民徴発反対暴動をまともに経験していること，などにより，他の民族と同じ道を進むことになるのである。ウズベクはもともと，ロシアの南下政策の前線基地であり，同時に，外国軍隊の侵入の危険性も十分あるため，革命政権も防衛に万全を期したところである。

ウズベクが革命と内乱にまき込まれて行く発端となった事件は，やはり1916年の中央アジアにおける反乱であろう。住民徴発の命令が伝達されると，労働者，農民を中心とするウズベク人の反乱が起った。トルキスタンで最初に反乱を起したのが，このウズベク人であった。もともと，騎馬民族の血の流れるウズベク人は，好戦的な面もあったためであろう。今日のウズベク共和国の首都タシケントでは，当時ウズベク人がロシア人の植民地事務所に対して焼打ちを

行い，ツァーリの部隊との戦闘も行われた。さらに，反乱軍はタシケントに急派されたツァーリの部隊を，外部との連絡を断って孤立させることに成功した。ツァーリの軍隊の武器弾薬はウズベク人に奪われ，労働者や農民はこの武器で武装し，市街戦を展開したのである。この反乱軍は，ヨーロッパ戦線におけるツァーリの精鋭部隊に移動命令を出し，ようやく鎮圧するほど強力なものであった。

その後，1917年に臨時政府が政権の座につくと，辺境諸民族に対する圧迫の廃止がさけばれたにもかかわらず，実際にはヨーロッパにおける戦争遂行のために，食糧供給地としてのウズベクに対しては，相変らず徴発に徴発が重ねられたのである。二月革命の結果，ウズベク人が得たものは何であったか。それは社会主義でもなく，民族独立でもなかった。やがて，十月革命におけるレーニンの武装蜂起がウズベクにまで伝えられると，タシケントのボルシェヴィキ労働者達も，武装蜂起により政権を掌握する準備を開始した。

しかし，タシケント革命委員会のあるタシケント・ソヴィエトは，士官学校生徒及びコサック白衛軍による攻撃を受けた。さらに，反革命軍はタシケント要塞を占領し，市街戦が始った。これに対して赤軍は，労働者と農民を武装させ，白衛軍と戦った。1917年11月，赤軍は反革命軍を絶滅し，ウズベク及びトルキスタンにおけるすべての政治権力はソヴィエトに掌握されたのである。この結果，タシケントにはトルキスタン・ソヴィエト[41]が樹立された。しかし，コサックの反乱でウズベク地方は，ソヴィエト・ロシアとは別の方向へ進みつつあった。すなわち，1917年11月のコーカンド自治政府の樹立である。この政府はウズベク人を含むトルキスタン赤軍部隊によって，全滅させられてしまった。その後も，反革命運動がなお続き，中央アジアにおける民族自治を確立するため，ソヴィエト・ロシアと中央アジアとの関係を切ってしまおうとする反革命運動[42]が生じたのである。この反革命は土着の封建領主を中心とするもので，バスマチ運動（Basmachi Movement）と呼ばれている。

この頃，イギリスがボルシェヴィキ革命に干渉して，カスピ海周辺に軍隊を派遣していた。このイギリス軍に白衛軍，白系コサック，コルチャック軍が合

流し，トルキスタンに侵入せんとした。これを迎えるトルキスタン赤軍は，単独では反革命軍の敵ではなかった。特に，赤軍の装備は非常に悪かった。このため，レーニンの指令により，ボルシェヴィキ中央委員会より委員が派遣された。その主たる任務は，トルキスタンを再びソヴィエト・ロシアにもどし，トルキスタンにおける白衛軍を撃退し，トルキスタン・ソヴィエト政権を樹立することにあった。レーニンの命令[43]を受けた首席委員V.V.クィブィシェフは赤軍を率いて1919年冬，ウズベクの砂漠で苦しい行軍を続け，白系ロシア人ならびにコサックの白衛軍を掃討[44]したのである。レーニンのトルキスタンに対する作戦は，カスピ海方面から北上するイギリス干渉軍と，白系ロシア軍ならびにコサック白衛軍に対する防衛であったと考えられる。レーニンはウズベクその他のトルキスタン諸民族[45]に対して，次のように呼びかけている。

トルキスタンの共産主義者の同志諸君へ

同志諸君！人民委員会議および国防会議の議長としてではなく，一党員として，諸君に呼びかけさせていただきたい。

トルキスタン諸民族との正しい関係を打ち立てることは，いまロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国にとって，巨大な，世界史的な意義をもっていると言っても過言ではない。

これまで抑圧下にあった弱小諸民族とのソヴィエト労農共和国の関係は，全アジアにとって，世界のすべての植民地にとって，数千，数百万の人びとにとって，実践的な意義をもっている。

私はこの問題に特別の注意をはらうこと，実例にもとづいて，行為によって，トルキスタンの諸民族との同志的な関係を打ち立てるために全力をつくすこと，イギリス帝国主義を先頭とする世界帝国主義に対する献身的な闘争のために，大ロシア帝国主義のあらゆる名ごりを根だやしにしようというわれわれの願望が，誠実なものであることを，行為によってこれらの民族に証明すること，われわれのトルキスタン問題小委員会に最大の信頼をおき，同小委員会の指令――この指令そのものは全ロシア中央執行委員会がまさに上のような精神に立って，同小委員会にさずけたものである――を厳守することを切に諸君にお願いする。

私のこの手紙にこたえて，この問題に対する諸君の態度を知らせていただければ，

たいへん幸せである。

共産主義者のあいさつをもって　　ウラジミール・ウリャーノフ

このレーニンの手紙にある如く，もしここでトルキスタンがソヴィエト・ロシアから分離独立して，白衛軍の手中に握られたならば，ボルシェヴィキ政権自体，その運命がどうなっていたかわからない。レーニンにとって，まことに危機せまる時期であったといえよう。また逆に，それ故にレーニンの手紙の真意が，かならずしもトルキスタン諸民族の真の独立を願っていたものでないことも，自明となるであろう。とにかく，ウズベクがウズベク共和国としてソヴィエト連邦の一員になったのは，1924年のことであった。

10. トルクメン

トルクメンにおける民族独立運動と，ボルシェヴィキ政権樹立の歴史も特殊な事情のもとにある。帝政ロシアのイスラム教徒支配に比較して，ソヴィエト・ロシアのそれは非常に厳格なものであった。ヨーロッパロシアにおいては，貧農あるいは農奴的な階級が歴史上存在したが，トルキスタンにおいては，そのような階級はなかった。むしろ，大地主，自作農，小作人と分類され，他は遊牧民であった。従って，その相互関係は，決してレーニン主義によって説明されるような対立したものではなかった。その理由については，いずれ検討してみるつもりであるが，要するに，イスラム教の同胞主義[46]に基づくものではないかと考えられる。例えば，1917年のトルキスタン・ソヴィエト大会において，革命最高権力の機関にイスラム教徒を含めることは，絶対に許せない，という決議[47]をしている。しかし，ソヴィエトからイスラム教徒すべてを排除すれば，トルキスタンにおける人民の数は極端に減少してしまう。このような事情も考慮に入れておかねばならない。1917年の二月革命，十月革命，さらにその後の内乱と干渉戦においては，このようなイスラム教徒排斥を行うだけの余裕がなかったことも，イスラム教徒に対して妥協的な政策をとらせた理由のひとつと思われる。これについては，先に掲げたレーニンの手紙によって十分理解されよう。

トルクメン人も，1916年の人民暴動を経験している。原住民が重税と徴用で苦しめられたことは，他のトルキスタン住民と同様である。二月革命でツァーリの官憲の支配から解放されたかにみえたが，臨時政府のもとでも，革命的変化はなかった。トルクメンは地理的に，今日のイラン，アフガニスタンと国境を接しているため，外国軍隊の侵入を受けやすい状態にあった。アフガニスタンの北，シル・ダリアの東にあったブラハ汗国は，アフガニスタンにおけるイギリス軍の反露工作の手がかりとなったところである。

一方，ロシア側も南下政策を遂行する関係上，このブラハ汗国がイギリスの手先と化すことは，不利であった。その後，ロシア側はこのブラハ汗国を征服[48]してしまうのである。この事実からも明らかなように，すべての分野でロシア人が勢力を得ているソ連邦内では，イスラム教民族は決して自治を保証されているとはいえないであろう。しかも，トルクメンはソヴィエト・ロシアばかりでなく，イギリスにも占領されるのである。一方，二月革命後も，ヒヴァにおいては旧制度が維持されていた。これは臨時政府が，大地主を保護する政策をとったためである。特にヒヴァにおいては，ケレンスキー政権の出先官憲と大地主との間に妥協が行われ，革命的労働者や農民を弾圧した。

十月革命が成功すると，ヒヴァの労働者は赤軍の援助のもとに，ソヴィエト政権樹立に成功した。しかし，イギリス軍の援助によって樹立されたコーカンド自治政府の出現で，トルキスタンは混乱状態におち入った。このコーカンド政権は，結局トルキスタン赤軍によって打破されるのであるが，この赤軍にはトルクメンの労働者や農民も武装して参加した。また，イギリスをはじめとする列国の干渉も，革命軍を苦しめた。トルクメンでは，イギリス軍がアフガニスタン方面より侵入してきたため，最もはげしい戦闘の行われた地区となった。イギリスがトルクメン南部を占領すると，アシハバード，クラスノヴォドスクなどは，イギリス軍から十分な武器，弾薬の補給を受けた反革命軍によって，次々とソヴィエト政権が倒されて行ったのである。

レーニンはこの事態を重視し，1919年9月，ロシア共産党中央委員会の名において，M. V. フルンゼ直率のソヴィエト赤軍に対し，白衛軍ならびに外国干

渉軍の掃討を下命した。赤軍は武器，弾薬などの装備[49]が非常に悪く，素手で戦闘に参加する兵士もいたという。しかしながら，1920年2月にいたり，革命軍はトルクメンの西方，カスピ海に臨むクラスノヴォドスクにおいて，イギリス軍に援助された白系ロシア軍に大打撃を与え，これを占領した。トルクメンにおけるソヴィエト政権がここに樹立されたわけである。1924年[50]であった。トルクメン共和国として，ソヴィエト連邦の一員となったのである。

ここで，レーニンの民族政策の一端をうかがうことが出来る。すなわち，アシハバード，クラスノヴォドスクなど，トルクメンの各地方がイギリス軍に占領され，白系ロシア軍の根拠地化されると，レーニンはイギリスの属領と化しているアフガニスタンにおいて，ボルシェヴィキ革命を期待した。レーニンはアフガニスタン王に対し，必要とあれば，いかなる援助も与える用意をしていた。レーニンがその政治権力を維持するためにとった手段として，対アフガニスタン政策をみる必要があろう。ロシア・ソヴィエト社会主義共和国の外交文書として，レーニンが署名した書簡[51]に次のようなものがある。

アフガニスタン王アマヌラ汗あてのメッセーシ

ロシア国民へのあいさつと，陛下が帝位につかれたむねの報知を含んだ，自由な，独立のアフガニスタン民族を代表して送られた最初のメッセージに接し，とりいそぎ，労農政府と全ロシア国民の名において，外国の征服者から自己の自由を英雄的に守りぬいている独立のアフガニスタン国民に，回答のあいさつを送るものです。陛下に対しては，1919年2月21日の即位にちなんで，お祝いのことばを述べさせていただきたい。

事実，労農政府はロシア共和国の構成に入っているすべての人民に，同権と自由を与え，搾取者に反対する全勤労者の統合を宣言して，あなたが述べられているように，国際主義的な基礎を確立しました。

ロシアの実例に従おうというアフガニスタン国民の志向は，アフガニスタン国家の堅牢さと独立の，よき保障となるにちがいありません。

われわれは，ロシア国民と親交を結びたいという陛下の意向を歓迎し，公式代表をモスクワに任命されるよう，あなたにお願いするとともに，われわれの側としても，

カブールに労働政府の代表を派遣することを申し入れ，同代表の即時入国について，全当局に指示していただくよう陛下にお願いします。二大国民の間に，恒常的な外交関係を確立することによって，他国の自由と他国の資産に対する外国の野獣どもの一切の侵害に抗して，相互援助を行う広範な可能性がひらかれています。

アフガニスタン国民に，この最初のあいさつを送るにあたり，われわれは衷心からの幸福を感じており，陛下が貴国民の友からの，友情こもるあいさつをお受け取り下さるようお願いいたします。

モスクワ，1919年5月27日

ウラジミール・ウリャーノフ

およそ，今日のソヴィエト連邦の民族政策の理論は，レーニンによって決定されたところが非常に多く，その後ほとんど変更はないようである。しかし，共和国だけで15，民族の数は126にも達する今日のソヴィエト連邦は，民族問題がこじれたならば分裂の危険さえある。おのずから，民族政策に重点がおかれるのは当然であろう。ソヴィエト連邦の民族政策は，いわば社会主義民族論とでも呼ぶべきものであるが，これに関してはいずれ機会があれば論じてみたい。

トランス・コーカサスにおけるソヴィエト政権の確立過程に関する考察は次回にゆずる。すなわち，次回ではアゼルバイジャン，アルメニア，グルジアを対象とする。

〔註〕

(1) この戦争でロシアはトルコとクチュク・カイナルジ条約を締結し，黒海北岸をトルコに割譲させ，黒海及びエーゲ海における船舶の航行権等を獲得した。

(2) Nicholas V. Riasanovsky, *A History of Russia,* Oxford Univ. Press., N. Y. 1963, p. 293.

(3) シェスタコフ，荒川実蔵訳『ソ連史』岩崎書店，1952年，81頁。

(4) Nicholas V. Riasanovsky, *ibid.,* p. 253.

(5) シェスタコフ，前掲書，86頁。

(6) Nicholas V. Riasanovsky, *ibid.,* p. 253.

(7) *op. cit.,* p. 366.

(8) *op. cit.,* p. 368.

(9) シェスタコフ，前掲書，114頁。

(10) 副島種典著「ソヴィエト経済の歴史と理論」日本評論新社，昭和38年，2頁。

(11) マルクス，エンゲルス，レーニン「科学的共産主義論」プログレス出版所，モスクワ，1968年，日本語版85頁。

(12) 同書，256頁。

(13) 同書，183頁。

(14) 菊地昌典著『ロシア革命』中央公論社，昭和42年，349頁。

(15) アメリカ学会『原典アメリカ史』第1巻，岩波書店，昭和38年，13頁。

(16) 小椋広勝著『社会主義世界の形成』岩波講座現代3，岩波書店，1965年，5頁。

(17) マルクス，エンゲルス，レーニン，前掲書，364頁。

(18) 同書，121頁。

(19) 同書，154頁。

(20) フレデリック・Lシューマン，坂本，勝田，渡辺訳「ソビエトの政治」岩波書店，1967年，120頁。

(21) Edward Allworth, *Central Asia,* Colombia Univ. Press., 1967, p. 157.

(22) *op. cit.*, p. 211.

(23) *op. cit.*, p. 236.

(24) *op. cit.*, p. 238.

(25) *op. cit.*, p. 239.

(26) *op. cit.*, p. 210.

(27) *op. cit.*, p. 208.

(28) *op. cit.*, p. 208.

(29) *op. cit.*, p. 224.

(30) *op. cit.*, p. 225.

(31) *op. cit.*, p. 238.

(32) *op. cit.*, p. 241.

(33) *op. cit.*, p. 256.

(34) *op. cit.*, p. 261.

(35) *op. cit.*, p. 212.

(36) *op. cit.*, p. 215.

(37) *op. cit.*, p. 215.

(38) *op. cit.*, p. 227.

(39) *op. cit.*, p. 228.

(40) *op. cit.*, p. 257.

(41) パンクラトワ，広島定吉訳『ソヴィエト同盟の歴史』上巻，新興出版社，1951年，

328頁。

(42) 同書，108頁。

(43) 同書，110頁。

(44) Edward Allworth, *ibid.*, p. 234.

(45) レーニン，『東方諸民族の民族解放運動について』プログレス出版所，モスクワ，356頁。

(46) 松川二郎著『中西アシア地政治誌』130頁。

(47) 同書，130頁。

(48) 同書，127頁。

(49) Edward Allworth, *ibid.*, p. 234.

(50) *op. cit.*, p. 256.

(51) レーニン，前掲書，353-354頁。